

## メッセージアウトライン 出エジプト記8:1~32 「蛙、ブヨ、アブの災害」

主はモーセとアロンを通してナイル川の水が血に変わるという第一の災害でエジプトを打たれた。しかし、ファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞かずイスラエルの民をエジプトから出て行かせようとはしなかった。それゆえ主は第二の災害をエジプトに下される。

[1-6] 主はモーセに言われた。「ファラオのもとに行って言え。主はこう言われる。『わたしの民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。もしあなたが去らせることを拒むなら、見よ、わたしはあなたの全領土を蛙によって打つ。ナイル川には蛙が群がり、這い上がって来て、あなたの家に、寝室に入って、寝台に上り、またあなたの家臣の家に、あなたの民の中に、さらにあなたのかまど、こね鉢に入り込む。こうして蛙が、あなたと、あなたの民とすべての家臣の上に這い上がる。』」(1-4) イスラエルは「わたしの民」と言われているように、先祖アブラハム以来、主が契約を結ばれ、主のものとされている民である。そして今、主なる神が長い年月にわたってイスラエルを苦しめていたエジプトを多くの災害をもって打たれ、ご自身こそ唯一のまことの神であることを示されるのである。そしてそれはエジプト人の信じる多くの偶像の神々に対するさばきでもあった。

しかし、ファラオはモーセを通して語られた主のことばを拒んだ。拒んだとは書かれていないが、この後、主がモーセに命じられ、実際に蛙の災害が起こった(5-6)ことから、ファラオが拒んだということは明白である。ナイル川で蛙が大発生するということはそれまでもエジプトではしばしばあったことであろう。しかし、今回はそれが前例のない大規模なスケールでやって来たのである。蛙は多産で強い繁殖力を持っていたので、エジプトでは豊かな生命力を象徴するものとして神格化され神の一つに数えられていた。しかし、本当に大地に実りをもたらす豊かな収穫を与え、また人々にいのちを与えるのは蛙の神ではなく、生けるまことの神、イスラエルの主なる神のみである。それゆえ、蛙の災害はエジプト人の間違っただけの信仰とその神に対するさばきなのである。

[7]「呪法師たちも彼らの秘術を使って、同じように行った。彼らは蛙をエジプトの地の上に這い上がらせた」

もうすでにエジプト全地に蛙が満ちているのだから、呪法師たちはこんなことをする必要はないであろう。これはナイル川の水が血に変わった時と同じように、すでに大発生していた蛙をあたかも彼らの力で作り出したかのように見せかけたトリックであろう。彼らにそんな力があるのなら、蛙を増やすのではなく、蛙がいなくなるようにその力を使えばよい。しかし、彼らはそんなことはしないし、できなかったであろう。

[8] この蛙の災害を経験してファラオはモーセとアロンを呼び寄せ、「私と私の民のところから蛙を除くように、主に祈れ。そうすれば、私はこの民を去らせる。主にいけにえを献げるがよい」と言った。ファラオはついにここまで譲歩した。

[9]「モーセはファラオに言った。『蛙があなたとあなたの家から断たれ、ナイル川だけに残るようにするため、私が、あなたと、あなたの家臣と民のために祈るので、いつがよいかを指示してください』」

モーセがこのように言ったのは呪法師たちに自分たちの秘術によって蛙がいなくなったと言わせないため、また自然に消滅したのでもないことをはっきりさせるために、祈る時をファラオ自身に決めさせたのであろう。

[10-11] ファラオは「明日」と言った。なぜ「今すぐ」ではないのか。これはおそらくファラオがモーセの手を借りずに何とか今日中に呪法師たちの力によって片を付けたかと思っていたからではないだろうか。これに対してモーセは「あなたのおことばどおりになりますように。それは、あなたが、私たちの神、主のような方はほかにいないことを知るためです。蛙は、あなたと、あなたの家、家臣、民から離れて、ナイル川だけに残るでしょう」と答えた。これは自分の力やエジプトの神々の力によって何とかしたいというファラオの思いを打ち砕くようなことばであった。エジプトの神々には力はなく、イスラエルの神、主こそ力ある神であるということをファラオは今回も、いやでも思い知ることになるのである。

[12]「こうしてモーセとアロンはファラオのもとから出て行った。モーセは、自分がファラオに約束した蛙のことで主に叫んだ」

彼は小声でぼそぼそと願うのではなく、周りの多くの人々にも聞こえるように大声をあげて叫び、主に祈ったのである。

[13-14]「主がモーセのことばどおりにされたので、蛙は家と庭と畑から死に絶えた」  
(13)

これは彼がファラオのところから戻って来た翌日のことであろう。ファラオの指定したその日にこのことが実現したのである。その結果、人びとは蛙の大量の死骸を集めて山のように積み上げたので地は悪臭で満ちてしまった。(14)

[15] この出来事の結果、ファラオがモーセとの約束を守ったかというところではなく、「ファラオは一息つけると思うと、心を硬くし、彼らの言うことを聞き入れなかった、主が言われたとおりであった」ファラオの譲歩は見せかけのものであった。それゆえ主は続いて第三の災害をもたらされる。

[16-17] 主のことばによってアロンが杖で地のちりを打つと、それはエジプト全土でブヨとなり、人や家畜に付いた。ブヨはハエに似て黒褐色でメスは人畜から血を吸い、刺されると痛い。この時はエジプト全土のあらゆる土のちりがブヨになったかと思われるほどエジプト全土に大発生したのであろう。

[18-19] エジプトの呪法師たちも今回も同じようにしてその秘術でブヨを出そうとし

たができなかった。それで彼らはファラオに「これは神の指です」と言わざるを得なかった。しかし、それでもファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。7:3~4節で主がモーセに言われたとおりである。それゆえにまた新たな第四の災害がエジプトに起こるのである。

[20-21] 「…明日の朝早く、ファラオの前に出よ。見よ、彼は水辺に出て来る」これはナイル川の川岸に出て来るということで、7:15節でも同じ表現があった。ナイル川はエジプトに豊かな実りをもたらす神聖なものと考えられていたので、ファラオは何かの宗教行事をするためにナイル川の岸に出て来るのであろう。「彼にこう言え。主はこう言われる。『わたしの民を去らせ、彼らが私に仕えるようにせよ。もしもわたしの民を去らせないなら、わたしは、あなたと、あなたの家臣と民、そしてあなたの家々にアブの群れを送る。エジプトの家々も、彼らのいる地面も、アブの群れで満ちる』」

今度の主のさばきはアブの大発生による災害である。エジプト全土がアブの群れで満ちるのである。アブはハエと同種類でハエよりも大きく、ブヨと同じく人や動物を刺して血を吸い、色々な病気を媒介することもある。

[22-23] 主はイスラエルの民が居住しているゴシェンの地を特別に扱い、そこにはアブの群れがないようにするとされる。なぜそのようにされるのか。その理由は「こうしてあなたは、わたしがその地のただ中であって、主であることを知る」(22) ためであった。すなわち、イスラエル人には特別な主の守りがあるということ、主こそイスラエルを守ることができる力ある神であるということであり、このことはそのままエジプトの空しい偶像の神々に対する圧倒的な違いを表している。エジプト人はこれらのことを今度の災害を通してはっきりと知らされることになるのである。

「わたしは、わたしの民をあなたの民と区別して、贖いをする。明日、このしるしが起こる」(23)

この災害はエジプトの神々とエジプトの民に対するさばきであり、主がイスラエル人をエジプト人から区別し、贖いをされるということは、主が意図的にイスラエルを救われるということなのである。

そして主はそのことは明日起こるとモーセを通してファラオに告げられた。

[24-25] 「主はそのようにされた。おびただしいアブの群れが、ファラオの家とその家臣の家に入って来た。エジプト全土にわたり、地はアブの群れによって荒れ果てた。ファラオはモーセとアロンを呼び寄せて言った。『さあ、この国の中でおまえたちの神にいけにえをささげよ。』」

翌日確かにおびただしいアブの群れがエジプト全土にやって来て、地は荒れ果ててしまった。ファラオはこのアブの災害に弱り果てて、一つの妥協案を示す。それはエジプト国外ではなく、国内でおまえたちの神にいけにえをささげよというものであった。

[26] しかし、モーセはこの提案を拒否する。「…私たちは、私たちの神、主にエジプト人の忌み嫌うものをいけにえとして献げるからです」

イスラエル人は牛や羊をいけにえとして献げるが、その牛や羊はエジプトでは神々に属する聖なる動物とされていた。しかし、まことの神を信じる者から見ればそれは偶像であった。

「忌み嫌うもの」とは偶像に対する軽蔑的表現である。エジプト人が偶像（彼らにとっては聖なるものであったであろうが）としているものをいけにえとして献げることは、エジプト人にとっては耐え難いことであり、「そんなことを彼らの目の前でしたら、彼らは私たちを石で打ち殺しはしないでしょうか」とモーセは言うのである。

[27] それでエジプト国内ではなく、「主が私たちに言われたとおり、荒野へ三日の道のりを行って、私たちの神、主にいけにえを献げなければなりません」とモーセは言う。

三日の道のりの旅をして主にいけにえを献げて、それが終わればエジプトに帰って来るかといえばそうではない。これはある期間イスラエルの民全員が出て行くことに対してファラオがどのような反応を示すか知るための一種のかけ引きのようなものであると思われる。

[28] するとファラオは今度は大幅に譲歩する。「では、おまえたちを去らせよう。おまえたちは荒野で、おまえたちの神、主にいけにえを献げるがよい。ただ、決して遠くへ行ってはならない。私のために祈ってくれ」

ファラオもエジプトへの度重なる災害でかなり気弱になっていたのかもしれない。

[29] それでモーセは主に祈ることによって、明日、アブがエジプトから離れることを伝える。「ただ、ファラオは、民が主にいけにえを献げるために去ることを阻んで、再び欺くことなどありませんように」 蛙の災害の時に、ファラオはイスラエルの民を去らせると約束した(8:8)。しかし、彼はその約束を破った。それで、そういうことが二度とないようにモーセは念を押したのである。

[30-32] しかし、モーセが主に祈ってアブがエジプト全土からいなくなったら、ファラオはまたも心を硬くし、民を去らせなかったのである。エジプトにとってイスラエル人は貴重な労働力であったので、それを失ったら大きな損失となる。それで何としても留めておきたいという思いもあったのであろう。しかしそのファラオの強情さのゆえにさらに主なる神の力がエジプトに現わされ、厳しい災害でエジプトは打たれることになる。

イスラエルはあのヨセフの時以来四百年以上エジプトに滞在していた。そしてヨセフのことを知らない王が起こって以来、イスラエル人は虐げられ、苦役に就かされ、男の子が生まれた場合はナイル川に投げ込まれるという恐ろしい命令も出され、まさにイスラエル人は奴隷のように苦しみ、うめいていたのであった。しかし主なる神はそんなイスラエルを決して忘れてはおられず、ついに神の定められた時が来

て、イスラエルをエジプトから脱出させ、約束の地へと導かれるのである。主はそのための指導者としてモーセを立てられ、彼の兄アロンとともに用いられる。

主はファラオの心を頑なにし、それによって多くの災害でエジプトを打たれる。すでにナイル川の水が血に変わり、蛙がエジプト全土にあふれ、ブヨが大発生して人や家畜を刺し、さらにアブの群れも大発生してエジプト全土に満ち、大被害を与えた。しかし、主はイスラエルの民を特別に守り、彼らの住むゴシェンの地にはアブが一匹もいなかったのである。これらのことによって、主こそイスラエルをエジプトでの苦しみから救い出すことのできるまことの力ある神であることがわかる。エジプトの偶像の神々には何の力もない。イスラエル人を長い年月にわたって苦しめてきたエジプトは今、そのさばきを受けている。主はご自分の民を苦しめ虐げる者に対しては厳しいさばきをもって臨まれる。決して忘れてしまうようなお方ではない。主は信仰者の受ける悩み苦しみをご存じで、時が来れば必ず正しいさばき、正しい報いを与えられるのである。

そして主がイスラエルをエジプトから救い出されるように、今や主はすべての人々をモーセならぬ、ご自分の御子イエス・キリストによって救われる。それはエジプトからではなく罪からの救いである。それは一つひとつの災害を通してやっと解放され、救われるのではなく、御子イエス・キリストの

十字架の贖いによって一挙に救われるのである。まことの神を知らず、人間の作り出した偶像の神々を拝み、従い、肉の欲のままに自己中心に生きて、罪と死と滅びの闇の中に座り込み、何の救いの希望もなかった者を主なる神のほうから働きかけてくださり、救いの道を用意してくださったのである。イエス・キリストの十字架の死は私が神から受けるべきさばきの身代わりであったと心から信じ受け入れる者は罪赦され、救われ、神の子とされ、永遠のいのちが与えられるのである。

私たちはこの世にあって空しい偶像の神々に仕え、空しい生き方をするのではなく、力ある生けるまことの神、主を信じ、また救い主イエス・キリストを信じ、心から従い続ける者になりたい。そしてやがて私たちもすばらしい神の約束の地、新しい天と新しい地、神の御国へと入ることができるのである。